

【成果報告】

申請書では日本と中国の農業発展経路を比較するシンポジウムを開催する計画であった。しかし、本年度も新型コロナ禍で海外渡航が制限される中、この企画をあきらめざるを得なくなった。オンライン開催の可能性も考えたが、シンポジウム後の対面での人的交流も大きな目的であったため、それができない不利益を重く見て、中止とした。

次善策として、申請者が長年取り組んできたフィリピンの農業発展をオリジナルデータの分析により振り返り最近の課題をまとめる作業を行った。将来的には、日本、中国、フィリピンの国際比較に結び付けたい。

分析の結果わかったことは、「緑の革命」により1960年代から1980年代までは順調に生産性（ヘクタール当たりもみ米収量, kg/ha）が増加したが、最近では停滞していること（表1, WSは雨期、DSは乾季）、さらには、収量の不安定性（変動係数）が大きくなっていることが明らかになった（表2）。不安定性増大の理由として、イレギュラーな降雨がより頻繁に起こるだけでなく、それをさらに悪化させる要因として最近の土地の乱開発が農地の排水を阻害し人為的理由により洪水が増えていることが指摘できる。また、産業化の帰結としての農村労働力不足が営農を難しくしている側面も指摘することが出来る。

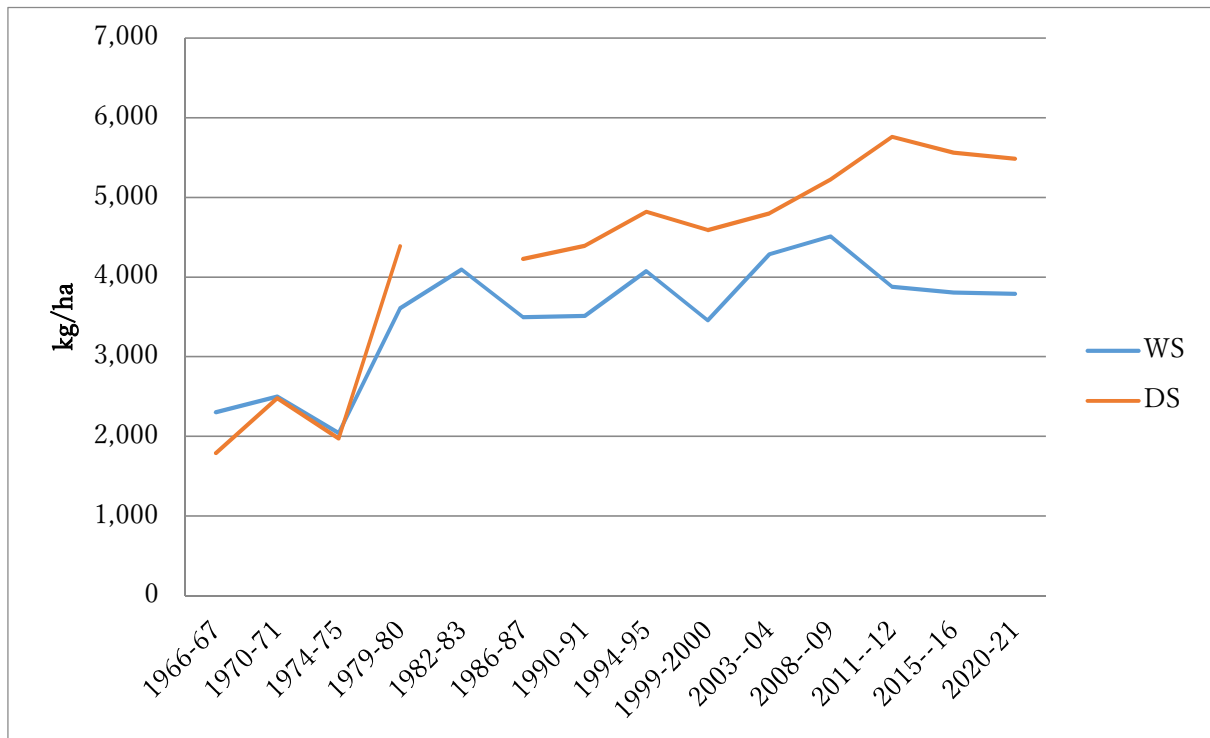


表1：フィリピン中部ルソンもみ米収量平均値、1966-2021

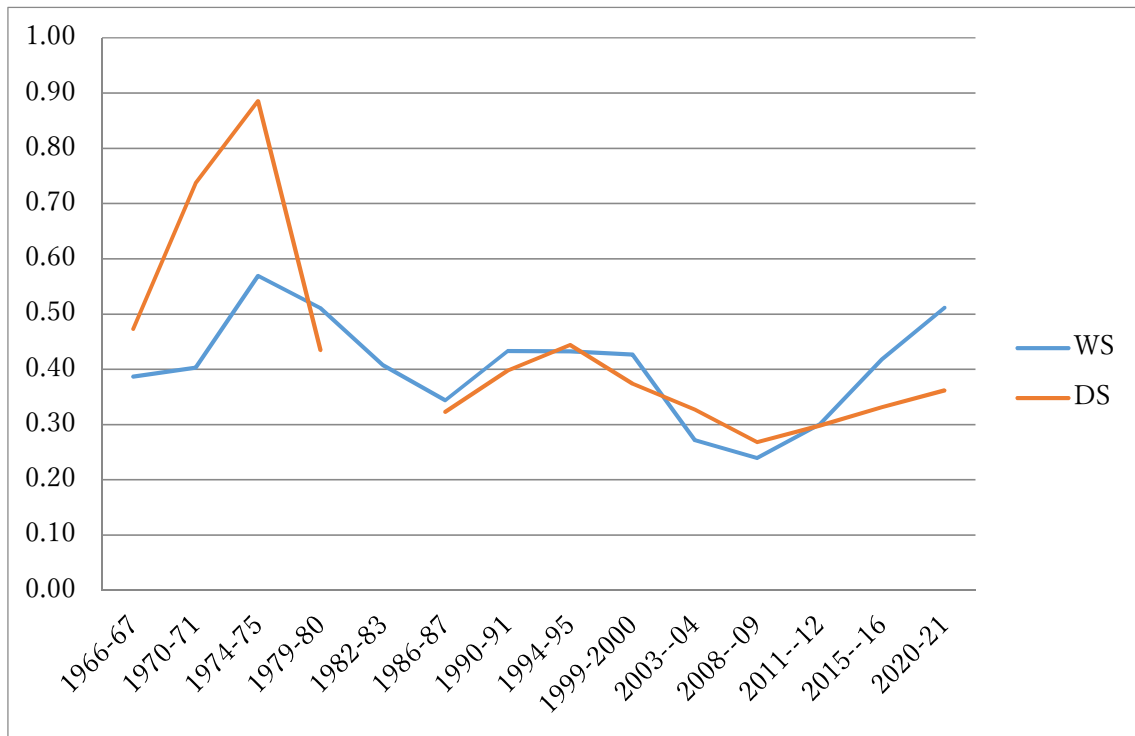


表 2 : フィリピン中部ルソンもみ米収量変動係数、1966-2021